

『葬書』の思想と環境論

著者名(日)	山田 利明
雑誌名	「エコ・フィロソフィ」研究
号	3
ページ	79-91
発行年	2009-03
URL	http://doi.org/10.34428/00003396



『葬書』の思想と環境論

文学部 山田利明

キーワード：風水、気、景観、埋葬

『葬書』は、墓地を選ぶ際の択地法を記したもので、風水説の基本的文献とされ、晋の郭璞の著と伝えられている。しかしながら、『晋書』郭璞伝にその名は見られず、『隋書』経籍志にも著録されない。広く知られるように、郭璞は占法や神仙術、あるいは天文地理にも精通した。『晋書』本伝によれば、司馬睿の臣であった王導の参軍となり、兵法・占法によって顕われ、のちには文章をもって聞こえた。このあたりの歴史的事実については、すでに多く記されているので省くが、河東の郭公より『青囊中書』九巻を受けたと記されていることが注目される。これにより天文・五行・卜筮の諸術に通達したと書かれているから、この書が占法を主としたものであったことがわかる。郭公については、客として河東に居り、卜筮に精通するという。郭公がどんな人物であったのか、ほかの文献にも見当たらない。『青囊中書』は、郭璞の門人趙載によって盗まれて火中にされた。

ともあれ、天文地理・五行・占法に通じた当代の知名人であったことは疑いなく、堪輿・風水の創始者に仮託されるのもそこにある。『四庫提要』は、きわめて冷静にそれを判断して、『葬書』は『宋史』芸文志に始めて録される、したがってこの書は宋代に出たものであるという。以下に『提要』の記事を略記しておく。

この書は宋より始めて出て、その後、方技諸家が競って粉飾したため、ついに二十篇の大部となった。蔡元定はその蕪雑を憂い、十二篇を削除して八篇のみを残した。呉澄はしかし蔡氏が十分に選定を尽くしていないことを憂い、その純正な原文を選んで内篇とし、真偽相い半ばするものを外篇とし、粗雑な部分は削除すべきではあるが、とりあえず残すべきものを雑篇とした。劉則章が親しくこれを受けて伝え、呉澄はさらに、注譯を施している。いまこの本（四庫全書本）が内篇、外篇、雑篇に分かれているのは、呉澄の旧本によるものであろう。注につい

ては、それが劉氏からのものか否かは判断出来ない。『宋史』はこの書を『葬書』としているが、後の術数家はこの書を尊んで『葬経』という。

以上の『提要』の説でほぼこの書の来歴は明らかであろう。ただし宋代以前にこの書が存在しなかったのかといえば、断言はできない。『提要』の説は、むしろ宋代以降の状況を論じたものと考えてよい。それというのも、こうした術数書は、多く秘伝として伝わり、特定の術数家以外目にする機会がないこと、宗教の経典と異なり必ずしも相伝されるとはいえず、長く死蔵される可能性もあることなどによる。こうした書が、偶然に世に出て版行されたのが宋代と考えることもできる。もちろん郭璞の撰というのは大いに疑問のあるところで、後の仮託と考えてよい。

要するに本書は、墓地の選定・択地にかかわる書であり、それも山岡を良地とみる思想を基盤とする。もう一つの特徴的な内容は、良地の選定を景観や地勢によって判断すること。これは、宋代頃から広くもちいられるようになった羅盤による判定とは異なり、それより一世代前の判定法といってよい。この書が風水説の基本的な文献として人口に膾炙されるのは、祖先の霊が、よりよい環境の中に葬られたことによって、現世に生きる子孫に繁栄と安全をもたらす、という思想によるのと、郭璞という稀代の術数家の手になったというところにある。さらにいえば、『葬書』は良地の判定の手段に「気」という概念を説いており、それが風水説の説く良地の最重要課題であることである。そのために、この書が風水の最初のもものとされるのであるが、確かに、一種の古色を感じさせる内容からすれば、宋代以前の出自も疑うことができる。

一、『葬書』内篇本文譯

ここで用いた底本は『四庫全書』本である。該書は『提要』に記されているように、内篇・外篇・雑篇の三篇に分けられているが、これが呉澄によるものか否か、明確ではない。ただ内篇が基本的な概念と事例を記しているのに対し、外篇は専門的・個別の記事となる傾向がみられる。雑篇は内篇で説いた勢と形の解説であって、確かに内篇とは異なる様相をもつ。

なお、本文の訳文後の（）内は注を抄訳したものと、筆者本人の補注である。

内篇

葬者乘生氣也、五氣行乎地中、然而生乎萬物、

(地中に)葬ることは生氣に乗せることである。なぜなら、五行のそれぞれの気

は地中をめぐって、萬物を生み出しているからである。

人受體於父母本骸、得氣遺體受廕、

人はその身体を父母の骸骨より受け、氣を得てその身体を全くして、父母の^{たすけ}廕をうける。

○經曰、氣感而應鬼、福及人、

經にいう、氣に感応して、鬼（死者）福運を人に及ぼすと。

（この經典が何を指すか不明。使者を鬼といい、この死者が子孫に禍福をもたらすというのが風水説の基本的な考え方である。良好な氣の地に葬られた鬼は、その環境に満足して、子孫に福運を与えるという。注には、「父母子孫はもと一氣を同じくす。たがいに相い感召して鬼福を受けるがごとし。」という。）

是以銅山西崩、靈鐘東應、

このゆえに、銅山は西方に崩壊し、靈鐘は東に感応してなる。

（注には、「漢の未央宮において、ある日理由なく鐘が自然に鳴り響いた。東方朔がいうには、必ずや主銅山が崩壊したのであろうと。幾日もたたぬうちに、西蜀から果たして銅山が崩れたとの上奏があった。日時を調べてみるに、まさしく未央宮の鐘が鳴ったその日であった。皇帝が東方朔に問うに、何によって知ったのかと。東方朔が答えるに、銅は山より出ず、氣は相い感応す。それは人がその体を父母より受けるようなものであると。）」

木華於春、栗芽於室、

氣は春に華さき、栗は家の中に芽ぶく。

（注にいう、これもまた一氣の感応を言う。農民は栗の実を家の中にたくわえる。春になれば、栗の木は花を咲かせ、家の中の実は芽ぶく。実はすでに木から離れて久しいが、その花もこの実も本性はもともと氣より得たもの。相い感応することは、父母の骨が葬られて、（地中の）生氣に乗り子孫の福運の盛んになるようなものであると。）

蓋生者氣之聚凝結者成骨、死而獨留、故葬者反氣入骨、以廕所生之法也、

考えてみれば、（人が）生れるのは氣が集まって固まり、骨となるからである。死ねば骨だけが残る。したがって、葬とは拡散した氣を骨に再び入れて、生れる

ことを助ける法である。

(注にいう、乾(陽)は父の精であり坤(陰)は母の血である。(陽と陰の)二つの気が感応し合一して、精が化して骨となり、血は化して肉となると。)

丘壠之骨、丘阜之支、氣之所随、

丘や壠(うね)の梁骨、岡(台地)や阜(丸い土山)の支峰、気が流れる筋である。

(注に、丘壠は陰、岡阜は陽となす、丘とは高い梁骨をもつもの、山の石を伴うものをいう。壠は高くなると自立することができない。かならず石で下地を作りその上に土を盛れば高く聳えすことができる。岡とは(山の)跡である。土山を阜となす。支峰の細い梁線をもつものをいう。壠の骨石をもつものは、気が流れる。ここでは、土だけではなく適度に岩石が混じった岡丘を良地としている。)

○經曰、氣乗風則散、界水則止、

經にいう、気は風に乗って拡散し、水流によって止まる。

(注にいう、生氣は支壠(支峰)の体質によって流れ、滔滔として流れ行く。水を区画としなければこれを止めることはできない。城郭はかならず前後左右にそのまわりをびたりと閉じられるようにしなければならない。そのようにしてはじめて風を内側におさめて拡散させないようにすることができる。)

古人聚之、使不散行之、使有止、故謂之風水、

古えの人はこの風を集めて、拡散させないようにし、都城にこれを留めた。この故に風水という。

(高い峰をもつ地は、天の陰気が上昇して生氣が降って露となって凝結する。恐るべきは、風が冷たく拡散しやすいことである。たとえば、人が家のおく深く密室にいた場合、わずかな隙間から風が通って肩や背中にあたると、冷えて病気になるようなもので、そのため城郭はびたりと固く閉して気が集まるようにすべきである。)

風水之法、得水為上、藏風次之、

風水の法は、水を得ることを最上とし、風を蓄えることはこれに次ぐ。

○經曰、外氣横形、内氣止生、蓋言此也、

経にいう、外気（水流）は横（東西）に流れ、土の中の内気は生に止まる、というのはこのことをいう。

（水は土の表面を流れる。これを外気という。気が土中に蓄えられたもの、これを内気という。故に外気すなわち水流は必ず東西に流れ、土中の生気はそこに止まる。）

何以言之、氣之盛、雖流行、而其餘者猶有止、雖零散而其深者猶有聚、何によってそう言うのかといえ、気が盛んとなって流れ出ても、その余の部分はまだ土中に止まるものもあり、拡散しても土中深くにあるものは、集り結して止まるものもある。

（高い峰をもつ地は、その高低の落差、山や谷あり、あるいは遠く近くに各々（以下欠文）・・・があるような土地は、一地その地力を尽くすことができる。）

故藏於潤燥者宜深、藏於坦夷者宜淺、

したがって、乾燥した土地では気は深いところにあり、平坦な土地では浅いところにある。

（上の句については丘や峯のことをいったもの。下の句については丘や峯の周囲の平坦な地をいったものである。高い峯の地は、陰の形象をもつ。気は土中であって強く、下降していく。故に乾燥した地では深く埋葬する。平坦な地は陽の形象。気は地中の外にあって、弱く、浮上している。この故に平坦な土地では浅く葬る。）

○經曰、淺深得乘、風水自成、

経にいう、埋葬の浅さ深さによって気に乗ずることができれば、風水は自然と成功する。

（高い丘陵地の埋葬は、潜めて表にあらわにするものではない。その故に深く埋葬して下に沈んだ気を取るようにする。平地の埋葬は露出して隠さず。その故に浅く埋めてその浮上した気を取る。「乗ずるを得る」とは、埋葬する棺が生気に乗ずることを言う。「浅深」について、世間で行っている「九星白法」は、埋葬の穴の深さまで何尺何寸と定めているが、これは誤りである。金や銀を精錬する爐の高さに応じて決めるのがよい。）

夫陰陽之氣、噫而為風、升而為雲、降而為雨、行乎地中而為生氣、

陰陽の気の噫したものが風となり、天に昇っては雲となり、地に降りては雨となり、地中をめぐるは生氣となる。

(陰陽の気とは地中の生氣であるが故に、噫すれば風となり、天に昇っては雲となり、地に降って雨となる。およそ、天地にあって万物を育成する所以のものは、この気でないものはない。思うに、このようにいうのは、「葬は生氣に乗ずるもの」であって、そのことを重ねて述べて、意義を明らかにするものである。私はかつてこう述べた。よく生かしよく殺すものみなこの気による。埋葬は、その方法を得れば生氣となり、その方法を失すれば殺気ともなると。)

夫土者氣之體、有土斯有氣、氣者水之母、有氣斯有水、

土は気の本体であり、土あれば気があり、気は水の母体であって、気があれば水がある。

(気はもともと形がなく、土に借りてその形をつくる。土によって気のあり様を知ることができる。水はもともとその母体となるものがないが、気に借りてそれを母体とする。したがって気によって水があることを知る。五行は天の一によって水を生じるも、水は何より生れるか。水を生むものは金なり。金を生むものは土、土は金を蔵する。質無くしてその気のみあり。乾(陽)は坤(陰)を内に蔵して、隠してあらわさず。)

○經曰、土形氣、形物、因以生、

經にいう、土は気に形どり物を形づくる。これによって生ずる。

夫氣乎地中、其行也因地之勢、其聚也因勢之止、

気は地中をめぐる。そのめぐるは地勢による。気が集まるのは地勢のたわむところによる。

(気が地中をめぐるのを、人はその始まりを見ることができない。だから地勢によってそのめぐり方を知ることになる。地勢のたわみによって気の凝集を知ることができる。)

葬者原其起、乘其止、

埋葬は気の起るところに始まり、その止に乗ずるをいう。

(埋葬を上手にするものは、かならずその気の起るところをきわめ、地勢を見てその気のとどまるところ、たわむところを見る。そのようにして気穴をさぐる。)

およそ「止」（たわむ）というのは、山や川が一体となって景観を構成するところ。）

地勢原脉、山勢原骨、委蛇東西、或為南北、

地勢の原脈、あるいは山勢のももとの骨組みは、東西、南北にうねうねとくねる。

（平坦な地は土多く、河岸や干潟の地には石が多い。平地においては、土の骨脊を脈とし、丘陵においては石の骨脊を骨という。）

千尺為勢、百尺為形、

千尺（一尺は約二二センチ）の範囲を勢といい、百尺の範囲を形という。

勢来形止、是謂全氣、全氣之地、當葬其止、

遠く地勢の来現を見きわめ、近くの地形の変化を察する。これを気を全うするという。気を全うする地のその気の止まるところに埋葬すべきである。

（その遠勢の来現をきわめ、近形のとどまるところを察する。遠景近景いずれも適すれば、山水は一体となって気を全うする地といえる。その気の止まるところを求めて埋葬すればことごとく善し。この「止」の一字はまことに重要である。世間で葬儀を営むもの、気を全うする地は乏しくないが、ただ気の止まるところが曖昧になっているだけである。）

宛委自復、回環重複、

地勢は南北・東西にうねうねとのび、地形はいく重にもかさなりあってめぐる。

（気を全うする地の地勢形態はこのようである。）

若踞而候也、若攬而有也、

それは人のうづくまるように不動のかたちで、何かをまつような姿をもつ。あるいは、貴人が座席に端座して、器物を觀賞する姿にも似ている。

欲進而却、欲止而深、

進もうとしてかえって退き、止ろうとして深きに沈む。

（これはその地勢の姿をいう。とりまく山々はうやうやしく朝見する姿であって、主人を僭越したり、人と衝突したり、あるいは不遜な姿ではなく、地に蓄えられ

た水は、淵にとどまって清らかに澄み、岸にせまって叛き、無情な姿ではない。)

来積止聚、沖陽和陰

来山はその気を凝結し、気を積層して拡散させず、止水はその心情を融和させて、気を積集して流すことはしない。これこそ陰陽こもごも交差して山水の中和するところ。

土高水深、鬱草茂林、貴若千乘、富如萬金、

土壤が厚く水流の深い地で、草や木が鬱蒼と茂る地は、その貴重なこと千乗の国、萬金の富に当たる。

○經曰、形止氣蓄、化生萬物、為上地也、

地形が完全で気が止まり凝集する地は、生氣が地中に蓄蔵されて、あらゆるものを生み出す力をもつ。これこそ最上の地である。

(堂局の形態が完全で穴が気を集めれば、生氣は地中に内蔵される。埋葬によい地は、気の凝集により、生氣に乗ずる。そうなれば福運を子孫に現わす。)

地貴平夷、土貴有之、

大地は平坦を貴び、土質は有支を貴ぶ。

(龍脈の支流は平坦な広い地を良とし、土中には有支の紋様あり、土質は緩やかで固くなく、軟質にして乾燥していないところ。)

支之所起、氣隨而始、支之所終、氣隨以鐘、

支龍の起点より気は流れ始まり、支龍の終着点に気はずっしりと凝集する。

觀支之法、隱隱隆隆、微妙玄通、吉在其中、

支龍を見出す方法は、ものありて無きがごとく、その無くしてあるがごとく、まことに微にして妙。吉運はその中にある。

○經曰、地有吉氣、土隨而起、支有止氣、水隨而比、勢順形動、回復始終、法葬其中、永吉無凶、

經にいう、大地に良吉な気があれば、土はもり上り、支龍に気がとどまることあれば、水は地形になじみ、遠勢近形相互に感応して流れめぐる。こうした地に埋葬すれば永く吉運を得て凶運なし。

(平坦な地にわずかに土のもり上った形を見ることができる。たとえば泡のような形状、星・珠方・箱・印・玉尺・蘆鞭・机・亀・魚・蛙・蛤などの形は吉相。)

山者勢險而有也、法葬其所會、

山岡の峻険な地にあっても、それほど険しくないところがある。その地の気の止まり調和するところを求めて埋葬すべきである。

(天寶經にいう、およそ地脈の情況を見出し、地脈の住絶(原文は往絶に作るが、ここには地脈が続いているか断絶しているかという意にとる)を見るに、水流がその先に流れているようであれば、地脈は断絶していない。もし地脈が断たれていれば、そこに小明堂(龍脈のわだかまったところを明堂という)があり、地気は止まって水と交わる。佳良の地である。)

乘其所来、審其所癘、擇其所相、避其所害、

生気の乗るところに乗りようとすれば、その地の来歴を調べ、その地相を選び、悪害の来るところを避けるべきである。

(埋葬は生気に乗ずることを目的とするから、生気が来り止まるところを知るべきである。たとえば、牛や羊のために踏みしめられ、地相が崩れたり、開墾されたり先人が誤って地相を変えたりしたところは心すべきところである。真の局は、水は清浄であり、砂はきよらかである。前後左右四方の地形地相をよく見て察すべきである。)

是以君子奪神功改天命、

このゆえに、聖人は陰陽の枢機を用いてその妙を運用し、風水の神功をとって天の歴数をも変えることができる。

禍福不旋日、經曰、葬山之法、若呼吸中言、應速也、

禍福は日をめぐらずというのは、經にいう、山に埋葬する方法は、呼吸のように息を吐き吸うようなもので、その逆と順、すなわち禍と福とが直ちにあらわれることをいう。

山之不可葬者五、氣以生和、而童山不可葬也

埋葬すべきでない山に五つある。生気は調和を生むが、童山には埋葬してはならない。

(土の色はつややかで、草木も繁茂している情景は大地の美しき光景であるが、童山(はげ山)は土味固く、土脈も枯れて中和の気を発生させない。埋葬すべからざるところ。)

氣固形来、而断山不可葬也、

気はもともと土によって形となる。したがって断ち切られたような山容をもつ山には埋葬すべきではない。

(土は気の体、土あれば気がある。山が削断されたかたちであれば、すなわち生氣が断たれている。)

氣因土行、而石山不可葬也、

生氣は土によってめぐる。石山には葬るべきではない。

(石は山勢の原骨である。骨とは石である。それなのに石山をなぜ非とするのか。それは気が融結するところに石があるのがよくない。)

氣以勢止、而過山不可葬也、

生氣は山勢によってとどまる。したがって過山(両端が垂直に切れた山)には葬るべきではない。

氣以龍會、而獨山不可葬也、

生氣は龍脈によって会集する。したがって、単独で聳える山はよろしくない。

(龍脈は支脈主脈によって構成される。あたかも兄弟・雌雄によって完全なものが作られるようなもので、多くの山々が集まって良穴吉局が作られる。)

○經曰、童断石過獨、新生凶而消已福、

經にいう、童山断山石山過山獨山に埋葬すれば、新たな凶事を生み福を消す。

上地之山、若伏若連、其原自天、若水之波、若馬之馳、

葬地としての良地は、伏すような姿をもち、天から発してつらなるようにみえ、山形は水の波のように、あるいは馬の馳るように見える。

其来若奔、其止若尸、

その姿を迎え見るに奔馬のようであり、その止まった姿は不動の姿。

若懷萬宝、而燕息、

多くの宝物を抱くような形、心やすらぐ形態をもち、

若具萬善而潔齋

多くの善行をもって精進潔齋するように、余祐あってゆったりした形

若橐之鼓、若器之貯、

気に満ちた橐のように、食物を一杯に満した器のように、

若龍若鸞或騰或盤

龍のようにあるいは鳳凰のように、舞い上りぐるぐる回る、そうした山容をもつ。

禽狀獸蹲、若萬乘之尊、

鳥は伏し獣もうずくまるほど尊い山。

天光發新、朝海拱辰、

見わたす限り気象清麗、天より光あらたに、海のはて星のはてまで服従させ、

龍虎抱衛、主客相迎、

龍や虎が相い守って局を形成し、主客相応する地、

四勢朝明、五害不親、

四勢（龍虎主客）相い応じて明浄な地は、五害（童斷石獨過山）にはふさわしくない。

十一不具、是謂其次、

以上述べた上地の十一の状況に欠けるところがあるものは、その次の段階になる。

二、『葬書』の思想

全文を通して読めば、この書が明らかに埋葬のための良地を記したものであること

がわかる。その良地選定の理論は、気と水である。『葬書』のいう気とは生氣であり、気が形ととして現れたものが土、水は気より生ずるから土と水とが最も重要な要素となる。五行相生では、水は北方、土は中央、土より金が生じ金より水を生ずる。したがって、土厚ければ水は清浄となる。土を風水の基準として考えるのは、この思想によるのであろう。

ところで、『葬書』の基本的な考え方の中に、草木が繁茂し清らかな水流のある局を上地とするのは、埋葬の場所としての適地である。しかも、その土質は軟らかく乾燥していない。おそらく、こうした土地は葬地としてよりも、むしろ農地として有用の地であろう。確かにそうした農地に適した地は、生氣に溢れあらゆるものを生み出す力をもつ。死者を生氣に乗せるには最適の地ということになる。ただ、『葬書』は、そうした適地、つまり局をそれだけではなく、その周囲を含めた景観の中に位置づける。

局を形成する地形は、主峰山塊と、左右の高岡（青龍・白虎）とから構成され、主峰から流れる気を拡散させずにここに止めるための、密封された地形をいう。この局の選定はあくまでも景観の観察によるもので、風水師の優れた眼力が求められるところである。

ところで、『葬書』に記される風水の意義であるが、それは死者を良地に葬ることで、生者が幸運を得ようとするもの。ここに記された良地は、死者のための墓所であって、生者の住む地ではない。ただし後代には、こうした局が小は家屋・村落から大は都城の築城にまで求められるようになる。その意味で、『葬書』のあり方は、古い風水説の理念によるものと考えてよい。問題は、こうした風水の良地が良好な自然環境をもつことである。それは、その選定が景観にもとづく以上、自然のもつ美、景色の秀麗さが基準になることは避けられない。気の拡散を防ぐために盆地状の局は、気象的にいえばやや厳しい条件をもつが、外敵の侵入を防ぐという面からは、大きな効果を有する。

結局、初期の風水は、人が感じ得る快適な環境を良としたものとも考えられる。その中でも童山（はげ山）、石山を避け、断山を忌むのは、外観だけではなく災害の誘発を防ぐ意図もあったのであろう。いうまでもなく、はげ山や土を削られた山は、洪水や土砂崩れを誘引するし、石ばかりの山も地震や大雨による崩落を起こす。さらに孤峰は天候の急変、すなわち不安定な気象の要素となる。気の流れを重視するのは、いわば安定した気候を求めるところにある。そうなると、初期の風水説というのは、土壌の肥えた土地、一種の景観を備えた地、そして災害に遇いにくい地を求める方法と解してよい。平穏な気候というのもその条件の中に入るが、それは気の流行を想定

した際の条件であって、地形的に気象の急変を招き易い地は避けられたということであらう。

一体、こうした土地が葬地といて求められたというのはどういうことであろうか。それは、このような土地こそが生気の横溢した地、ものを産み出す力をもった地と理解されたことによる。この土地の生気に死者を乗じさせることで、死者をとりまく環境を快適なものとする。強い先祖神崇拜の中から出た思想であるが、それには生者を含めて先祖と固く結びつく一体性が基盤となる。